



(二の丸庭園 4/19)

中国が東シナ海のカス田の開発工事の一環として、日中中間線を跨いで船舶の航行禁止を布告した問題で、中国側は、日本側の抗議を受けて「技術的事項の誤りであった」などと嘯いて中間線の日本側部分を撤回した。これこそが、何とかして既成事実を積み上げたい彼らの常套手段である。抗議がなければ“得たり”とほくそ笑んだ事だろう。中国の布告を承知していながらも、日本側の対応の不味さは何だろう。緊張感がないというか、変に中国に気を使っていると言うべきか、呆れ返った仕儀である。某首相は“冷静に対応を”と言うばかりであり、この問題でリーダーシップを発揮しようとしないう、某大臣は中国の意を汲んでいるのではないかと疑われても仕方がないような言動が見え見えである。

毅然たる態度で臨むべきであり、それによって日中関係が一時的に困難な状況になったとしても、将来的には双方の信頼感も増し、世界からも信頼を得ることが出来よう。

それにしても、中国の描いている戦略目標は何だろう。中期的にはアジアにおける覇権の確立以外になかろう。両雄並び立たずではないが、彼等は明らかに日本を貶めて、そのアジアにおける地位の急速な低下を画策していると見て間違いなかろう。日本よ、如何する。早くグランドデザインを描くべし。

さて、先般大先輩からの要請により、先輩の同期生をマッカーサー記念室に案内して、色々と説明した。その中に大変な勉強家の方がおられて、色々と質問を受けたり、返ってこちらが教えて頂いた事項が多数あった。

その中の一つに、『マ元帥愛用の「青春」の詩は、サムエル・ウルマンのオリジナルとは違っている。』という話があり、その関係の資料も頂いた。

「青春」の詩について、HP等で調べた結果の一部を紹介する。

① 原作者 サムエル・ウルマン (1840～1924 84 歳)

独南部でユダヤ人の長男として誕生、両親と共にアメリカに移住、南北戦争にも参加した。後半生は、アラバマ州バーミングハムにおいて、金物屋営む傍ら市の教育委員会やユダヤ教のレイ・ラビ (精神指導者) 等多くの奉仕活動を行った。1929 年ウルマン 80 歳の誕生日を祝って、家族が彼の書き溜めた詩を編集し、1922 年「80 歳の頃から」と題して出版した。この詩集の巻頭を飾ったのが、今尚多くのファンを魅了して止まない「青春 (Youth)」の詩である。「青春の詩」はウルマン 70 代 (78 歳と言われている) の作である。70 代になっても瑞々しい若さに溢れる、正に青年のような詩が作ることが出来るというのは素晴らしい事だ。驚嘆すべきことである。

② マッカーサー元帥と「青春」

忘れられたウルマンの詩を蘇らせたのはマ元帥である。元帥は、マニラの米国極東軍総司令部のデスク上にウルマンの詩を掲げ、愛誦していたと言う。このエピソードが 1945 年の「リーダーズダイジェスト」(12 月号) に詩の全文 (この時は、「How to Stay

Young」と題されていた。)と共に紹介された。尚、元帥は、数年前にルイスという人物から贈られたものであり、爾来座右の銘にしていた。

元帥は第一生命ビルのGHQの執務室にもこの詩を掲げ日々愛唱したといわれる。この関係でマッカーサー記念室には青春の詩の記念碑が置かれている。

元帥の愛唱した詩はオリジナルと違ってリライトされている。

### ③ マ元帥愛誦の詩の日本への紹介

元帥の愛誦詩(英文)に感動した岡田義夫氏(日本羊毛工業会の発展に寄与した人物)が自分で翻訳し、デスクの前の壁に貼っていた。その日本語詩「青春」を、氏の親友である森氏が写し取り、後年この詩を桐生の東毛毎夕新聞紙上で紹介した。青春の詩は、多くの反響・感動を呼び、多くの人々に生きる喜びを与えた。岡田氏の格調高い名訳は、とりわけ財界の著名人に感動を与え、その一人、トッパン・ムーア社長の宮澤次郎氏は終に「青春の会」を設立し、詩の普及に努めた。氏の逝去に伴い、会も消滅したが、その志を継承する人々により、新たな「青春の会」が設立された。

青春の詩を讃える記念碑が各地に建立されている。尚、日本の各界の浄財により、ウルマンゆかりのアラバマ州のバーミングハムの地に記念館が建てられ、今尚多くの愛好者が訪れている。

### ④ 詩の紹介

オリジナルを大事にすべきだとの意見もあろうが、岡田氏の名訳の方が好きだ。

「青春」

青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。  
優れた創造力、逞しき意思、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心  
安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ

年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。  
歳月は皮膚のしわを増すが情熱を失う時に精神はしぼむ。  
苦悶や猜疑や、不安、恐怖、失望こう言うものこそ恰も長年月  
の如く火を老いさせ、精気ある魂をも芥に帰せしめてしまう。

年は70であろうと、16であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。  
曰く、驚異への愛慕心、空にきらめく星辰、その輝きにも似たる  
事物や思想に対する欣仰、事に處する剛毅な挑戦、小児の  
如く求めて止まぬ探究心、人生への歓喜と興味。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる  
人は自信と共に若く 恐怖と共に老ゆる  
希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる

大地より、神より、人より、美と喜悦、勇氣と壮大、そして  
偉力の靈感を受ける限り人の若さは失われない  
これらの靈感が絶え、悲嘆の白雪が人の心の奥までも蔽い  
つくし、皮肉の厚氷がこれを固くとぎすに至ればこの時にこそ  
人は全くに老いて神の憐れみを乞うる他はなくなる。

(参考：青春の会のHP等各種HP、「青春」（新井満著）等)